

湯本 豪一

法政大学イノベーション・マネジメント研究センター 編

漫画にみる明治の新風俗

—近代化社会と「進取の気象」—

法政大学創立者 さったまさくに 薩埴正邦生誕 150 周年記念連続講演会
—明治日本の産業と社会—
第 12 回 講演録 2006 年 9 月 30 日(土)

2007/09/04

No. 4 1

Koichi Yumoto

New Manners and Customs Appeared in
Cartoons of Meiji Era:
"Frontier Spirit" and Modernized Society

In Commemoration of the Founder of Hosei University,
SATTA Masakuni and his 150th Birth Anniversary

September 4, 2007

No. 4 1

法政大学創立者・薩埵正邦生誕 150 周年記念連続講演会—明治日本の産業と社会—
第 12 回

湯本豪一（川崎市市民ミュージアム学芸室長）
「漫画にみる明治の新風俗 —近代化社会と『進取の気象』—」

○司会者（洞口） それでは、時間になりましたので、法政大学創立者・薩埵正邦生誕 150周年記念連続講演会「明治日本の産業と社会」を始めさせていただきます。

本日は、回を重ねまして12回目になりますけれども、川崎市市民ミュージアム学芸室長・湯本豪一先生にお越しいただきました。タイトルは「漫画にみる明治の新風俗—近代化社会と『進取の気象』—」というテーマでお話をいただきます。

湯本先生は私の先輩に当たるわけで、法政大学のご出身であります。現在、法政大学の大学院国際日本学インスティテュート及び文学部でも教鞭に立たれておられまして、後進の指導に当たっておられます。

皆さんご存じの方も多いかと思いますけれども、非常な大著を次々と著しておられまして、『図説 明治事物起源事典』であるとか、『明治ものの流行事典』であるとか、多くの著作の一部分だけこちらのパンフレットに掲げさせていただいております。インターネットなどで調べていただきますと、広範囲にわたってお仕事をいらっしゃる先生だということがおわかりになるかと思えます。

きょうは薩埵正邦先生の生誕 150周年を記念して、明治という時代がどのような時代だったのか、その点について多角的に理解する連続講演会なのですけれども、明治時代の漫画、風刺画を通じてその当時の様子を立体的に想像してみたいということでございます。

それでは、湯本先生、よろしく願いいたします。

○湯本 今、ご紹介いただきました川崎市市民ミュージアムの湯本といたします。

私は、きょうのテーマである、漫画に描かれた、漫画がどのような記録をしてきたか、漫画の記録性というものについて興味をもっているいろいろ調べたりとかしていたという経緯があります。そのような中で、特に漫画といたしますと、皆さん現代の方ですとどうしてもコミックとか、ストーリー漫画だとか、ああいうものを想像なさると思うのですけれども、今のようなコミック、いわゆるストーリー性のあるものにつきま

しては、まだ時代が浅くて、大正時代にストーリー漫画のルーツみたいな形で、特に岡本一平だとか大正期に出てきた漫画家たちによって創始されるということで、それより前の明治時代とか、江戸時代も含めてですけれども、特に明治時代につきましては風刺漫画というものが主体であったと考えられます。

この風刺漫画ということが明治時代に非常に大きな影響力をもっていたということがあるのですけれども、その背景にはいわゆる漫画雑誌、今でいうと先ほどの話に戻りますけれども、漫画雑誌などというと、どうしても厚いもので若い人たちなんかが一生涯電車の中でストーリー漫画、コミックなんかを読んでいる、そんなイメージになりますけれども、当時の漫画雑誌といいますのは、まさしく風刺を中心とした、特に自由民権運動などのかかわりは非常に強く、辛辣な風刺漫画などが掲載されて、それが民衆に対する影響力を与えたということで、同じ漫画といっても今とはちょっと様相が違っているということなのです。

実は、皆さんにお渡ししましたレジュメの文字の方（1）をみていただきたいのですが、こちらで最初に記録としての漫画資料ということを書いてあります。実は、私が先ほどもちらっと触れましたけれども、漫画というもの、漫画だからこそ描いて記録された資料としても、歴史資料、時代をあらわす資料としての漫画としての特殊性といいますか、ユニークさ、そこら辺のところ、例えばその下にありますが、写真だとか、イラストだとか錦絵などとはちょっと違っているのではないかと思います。

例えば、写真などは実際にそのものを撮ったり、景色を撮ったりします。それはそれで一つの事実でありますし、確かにそういうものが撮られたことによって時代や何かの記録というものが確実に残っているわけです。イラストにしる錦絵なども、例えば文明開化のよくみるものだと銀座のレンガ街が描かれたり、あるいはガス灯などが描かれたりだとか、そういう華やかなものが描かれて、それはそれとして一つの事実として描かれた記録としてあるわけですが、漫画というのはこの辺のものちょっと違っていると思うのです。

漫画の記録性というのはどういうことかといいますと、一言でいうと、そういうもののように、ある意味では写真で写しとったような事実を、みたままを描いているということではないのです。そこにはいろいろな意味で描いた人の意図が込められたり、あるいは時代性や何かアピールしたいものを本人が恣意的にそこに投影させたりとか、そのような形で実際にみたものではないのだけれども、逆にいいますと、そのような営為の中で物事の本質というのが、ほかの例えば写真だとか、錦絵なんかよりもより鮮明に浮かび上がってくる。そのようなものが漫画の特徴として、特に明治期などを考える場合には非常に重要なことではないかと思っています。

現在、新聞などで政治漫画などがちょっと載っていますけれども、ほとんど関心が持たれなくて、私なども余り新聞に描かれている政治風刺漫画なんていうのはこのご

る関心がなくてみないのですけれども、恐らくそういう面では、今はそういう風刺漫画というもののパワーが衰えている時代ではないかと思うのです。今と全く逆な様相として、明治時代の風刺漫画をとらえることができるのではないかと思うのです。

今、ご説明しましたように、漫画というものがある意味でそのものの本質をずばり表現しているということであらわす一つの資料として、コピーをとってきたので、このスクリーンに出したいと思います。

(パワーポイント)

これは、イギリスの「パンチ」という風刺漫画雑誌です。そこに載っていた漫画です。これは時代としましては、日清戦争の直前の時代に極東の情勢をヨーロッパの方でどのようにみていたかというもののなのです。

ここにニワトリが今まさにけんかをして、お互いに飛びかかろうとしているような状況があって、その後ろに熊が大木のところに寄りかかって、よだれを垂らしてその様子を見ているという状況です。これなどはまさしく日清戦争の直前の状況、あるいは極東における力関係をずばり表現したものではないかと思うのです。ここによろいをつけたちょっと小さ目なニワトリがいますけれども、これが日本なのです。日本よりちょっと大き目なニワトリが中国、清をあらわしているのです。これを我関せずという形で後ろの方で余裕しゃくしゃくでみている、これが熊でおわかりだと思わずけれども、ロシアをあらわしているのです。このロシアがいうには、どちらが勝ったとしてもおまえたちはおれの晩飯になってしまうんだというような説明がこの漫画にはついているわけです。

これをみてもらっても、例えばこの時代のさまざまな極東の力関係とかそういうものをいつ何があったとか、どのような形で対立が起こったとかというよりも、これだけでずばりそのものをあらわしているのではないかと思うのです。

それから、ちょっと時代が飛んでしまいますけれども、これは日本が第二次世界大戦に行く前です。いわゆるドイツとイタリアと日本で三国同盟したころを風刺したものです。この後ろにいるのが、大体この顔でおわかりだと思わずけれども、ヒトラーなのです。ここに猫が、ジャパンと背中に書いてありますけれども、後ろにヒトラーの手引によって焼けている暖炉の中に手を突っ込まれようとしているのです。これはイギリスの漫画ですけれども、当時の三国同盟、あるいは日本とドイツとの関係、そこら辺をどのようにみていたかというもので、ある意味で、ずばり三国同盟とはどういうものなのか、あるいは日本というのはどのようにみられていたのか、ヒトラーとの関係はどうかとか、そこら辺がこれ1枚でぱっと理解してしまう。そのような力を漫画というのはもっているのではないかと思うのです。

これは当たり前のことですがけれども、日本を猫に擬したりということで、さっきいったように写真だとか錦絵のように実際のものを描いているわけでも何でもないわけですが、ずばり本質をとらえている。この辺のところは風刺画といえますか、

漫画の強さということではないかと思っております。

では、明治時代の漫画というものがどのようなものに、どのような形で描かれていたかというのを、描かれた内容の前に漫画のあたりのことを少しお伝えいたしたいと思うのです。それが下に書かれている明治を記録した主な漫画誌という形で幾つかピックアップしたものです。これは、そのほかにもさまざまなものがあるわけですが、非常に有名なもの、あるいは影響力があったものとして、この5つを挙げてみました。

「ジャパン・パンチ」というのは皆さんもお聞きになったことがあると思うのですが、日本で最初の漫画雑誌で、チャールズ・ワグマンというイギリス人が横浜の居留地で創刊したものなのです。これがいわゆる定期行物としての漫画雑誌として日本で最初のものでありまして、同時にこの影響を受けた形でさまざまな動きが日本の漫画界にも出てきて、いわゆるこの辺から日本の近代漫画といえますか、ジャーナリズムの中の漫画というものの芽生えととらえることができると思うのです。

この「ジャパン・パンチ」というものは先ほどいいましたように、横浜の居留地で、主に居留地の中の出来事をかいているのです。居留地といえますと、本当に外国人だけが集まって、我々でいう町の中、町内会みたいな感じで、どこでだれが何か悪いことをしたとか、外人同士の小さな事件や何かも結構かかっているのです。だけれども、同時に日本の政治の動きだとか、日本の新しい時代に向かう中でさまざまな風俗などが描かれていまして、そういう面では非常に貴重な当時の歴史を記録した雑誌なわけです。

「ジャパン・パンチ」はものとしてはこういうものなのです。創刊号を除いてほぼこのデザインで踏襲されております。実は、これは木版刷りで1枚1枚、もちろん文字が書かれて説明があるのもあるのですけれども、裏は印刷されていないのです。なぜかといいますと、ワグマンが日本人の木版をやっている、例えば浮世絵関係の人ですとか、そういう者に頼んで彫らせて刷っている。そういうことなので、こういう裏を刷らない、いわゆる日本の当時の木版と同じような形でこういうものが刷られているわけです。

ちょっとこれをお返ししますので。時間の関係もあると思うので、申しわけありませんけれども、一ところで滞留しますと後の方がごらんになれないと思うので、ぱらぱらとみて次の方に回していただければと思います。

「ジャパン・パンチ」というのが先ほどいいましたようにイギリス人のワグマンという人が創刊したものなのですが、実は日本の漫画を考える上でもう一人外国の漫画家として非常に押さえておかなければいけない人物としまして、ビゴーという人がいるのです。それがその次にかかっている「トバエ」という雑誌なのですが、そのほかさまざまな日本人が描かれているものを発表した人です。

「トバエ」というと皆さんどんなものかおわかりいただけないと思うのですが、皆

さんのところにお回ししました、いわゆる鹿鳴館時代の日本人を風刺した猿まねという、めかし込んで洋風の格好で大きな鏡の前に立っている紳士淑女が、鏡のところでは猿で映っているという、高校の教科書などにも出ているぐらいで非常に有名なものなのです(2)。これをみていただければビゴーという人がどんな人だったかということがわかると思うのです。ワーグマンよりも時代は下がりますけれども、明治時代の自由民権が盛んな時期に日本のさまざまな風俗だとか、政治に対する風刺だとか、そういうのを外国人の目からみた形で描いているのです。

漫画でみる場合に、外国人という目でみたときに押さえておかなければいけないのがワーグマンとビゴーということなのですけれども、実はワーグマンのが当時の日本をどのようにみていたか、もう一つ象徴的な図柄としましてこれが挙げられるのです。よく出るのですけれども、羽のところにはヤングジャパンと書かれているオウム。オウムというのは物まねということの象徴としてオウムなのでしょうけれども、それが牛肉を食べているわけです。下の方にビールがあつたりとかということで、ビールと牛肉に象徴されるヨーロッパのものを単なる物まね鳥で何の考えもなく無批判にただただ取り入れている。そのような近代日本の若き姿といいますか、そういうのをこのような形でとらえているわけです(3)。

こういうものをみましても、あるいは先ほどの猿まねをみましても、外国人の目としては本当に何でもかんでも取り入れてしまう日本、それも無批判に近代化ということで、本当にいいも悪いもなくさまざまなものを取り入れてしまっている日本ということ、どうも外国的にはそういうイメージがあつたのではないかと思うのです。

それに対して、その下にありますこれは、「团团珍聞」というものに載った明治20年のものなのですけれども、実はこれが猿まねの作品ができるヒントになつたのではないかということです。これはいわゆる猿回しみたいな形で、当時の演劇、いわゆる鹿鳴館時代の舞踏会や何かを風刺している小林清親が描いた作品なのです(4)。例えば、同じ鹿鳴館や何かのものを風刺するにしても、こちらは、伊藤なり、井上なり、そういう政治のリーダーたちが猿回しをして鹿鳴館を演出している、そのような形でとらえているわけです。だけれども、逆に同じような事象に対してビゴーというフランス人にとっては、まさしく日本人が猿まねをしている、これと相通ずる感覚で日本をとらえたということがあるわけです。

そのようなことから幾つか細かくみていきますと、日本人の視点と外国人の視点という形で違っていたりするのですけれども、いずれにしても、そのような形でさまざまな漫画作品の中で明治という時代、その風俗であつたり、政治の動向であつたりというのが描かれているわけです。

もうひとつ大きなものとして3番目に挙げました「团团珍聞」、これは「まるまるちんぶん」と読みますけれども、この雑誌が明治を代表する時局風刺雑誌ということがができるのです。明治10年に創刊されて明治40年まで続いたということで、前後に多少

の記録されない時代はありますけれども、大きな幅をもって明治という時代をとらえているということなのです。

これが「团团珍聞」という雑誌なのですけれども、これがこのように文章が書かれていて、これは第3号という創刊直後の発行なので文章が割合多いのですけれども、その中にぱらぱらとめくっていただきますと漫画が出てきます。その後の号になりますと、もっと風刺漫画が多いような形のパターンになってくるわけです。これが自由民権運動を背景に明治10年に創刊されて、自由民権運動に、あるいはそれを支える人たちを活性化し、その風刺漫画が為政者などに非常に大きな影響力を与えているわけです。

この「团团珍聞」というのは今おみせしたような形で、さっきの「ジャパン・パンチ」などと比べるとちょっと小さ目なのです。実は、先ほどこれが非常に大きな影響力をもっているということをいいましたけれども、その一つとしまして、明治12年に発行部数などを調べたものがあったりするのです。その中で、例えば「東京日日新聞」が2万5,000部だとか、「郵便報知新聞」が1万4,000とか、「朝野新聞」が1万5,000とか、そういう中で「团团珍聞」が1万5,000という発行部数を誇っているのです。今でいうと、漫画雑誌という、そういう意味での政治的な影響力とかそういうことは考えられないのですけれども、今のことをみても、あるいはこれをもとにさまざまな類似の雑誌が出てきているということがありますが、そういうことをみても、非常に大きな影響力があったというのがわかっていただけだと思うのです。

これは「我楽多珍報」という、やはり「团团珍聞」の影響によって出てきた類似の雑誌の一つなのです。あるいは、これは「方円珍聞」というものなのですから、あるいはこれは「目ざまし新聞」。「目ざまし新聞」とか「方円珍聞」とか、この辺のものをみてもおわかりだと思うのですけれども、デザイン的にも「团团珍聞」をほぼまねしたということで、大きさ的にも、きょうお持ちしませんでしたけれども、ほとんどそれと同じような形のものなのです。そういうことで、非常に影響力を及ぼしているということがおわかりいただけるのではないかと思います。

時間が余りないのではしよりますけれども、その後、宮武外骨が創刊した「滑稽新聞」とか、北沢楽天が創刊した「東京パック」、このようなものがさまざまに出てきます。その「東京パック」が出た時代に、皆さんのところにお渡しした中にもあると思うのですけれども、「滑稽新聞」がこういう漫画を載せているのです。漫画雑誌が雨後のタケノコのようにいろいろ出てきて、本屋の店先が漫画雑誌ばかりになってしまったというような漫画なのです(5)。こんなものが出るぐらいにさまざまな漫画雑誌が出ているということで、こんなところをみていただいても漫画雑誌の隆盛というものがみただけのではないかと思います。

これは「滑稽新聞」の後の「大阪滑稽新聞」というものなのですから、パター

ンとしてはほぼ同じものなので、このような形のものが出ていたりします。

あと、「東京パック」はこういう大柄なもので、これの特徴としてはカラーを重視していて、見開きでカラーのページをつくったことによってよりインパクトを与えるということなのですけれども、「東京パック」も出ますと非常な人気を呼びまして、類似の雑誌がさまざまに出てきます。

これは合本になっているのですけれども、「東京ハーピー」という雑誌なのですけれども、ほとんどスタイルや何かも「東京パック」と同じものなのです。このようなものがさまざまに出てきて、明治の漫画界が非常な隆盛を極めていた。その一端はみてもらえるのではないかと思います。

このような形でさまざまに漫画雑誌の中に描かれている日本の近代化の中での動き、あるいは風俗だとかがあるわけです。その幾つかを紹介させていただくことにします。

その一つとして、先ほどワグマンとビゴーというものが猿まねとしての日本、あるいは物まね鳥としての日本というイメージを描いていますけれども、これもやはりワグマンが描いた「ジャパン・パンチ」の中に出てくるものなのです。馬を引っ張っています馬子も、馬でさえもこのような形で眼鏡をかけているということで、当時の日本の眼鏡ブームといえますか、これは別に目が悪くてかけているのではなくて、ある意味の流行といえますか、ブームなわけです。それをこのように馬でさえも眼鏡をかけているという形であらわしているわけです。あるいは、これはビゴーがかいたものでも、これもそういう眼鏡のブームを描いているもので、このようにさまざまな人がサングラスをかけているのです。ここにだっこされている子供もこのようにかけているのです。

このような形でビゴーとか、ワグマンというのは、向こうからみたらおかしな日本人の流行というものを興味をもって描いているのですけれども、逆にいうと、日本人はこの辺のことに気がついているのか、気がついていないのか、余り興味をもって日本の漫画の中には描かれないのです。そういうところからも、日本人と外国人の視点の違いといえますか、そこら辺のものがみられておもしろいと思うのです。

もう一つ、日本の当時の人物を象徴するような形で「ジャパン・パンチ」に描かれているのが、日本人の当時の格好なのです。帽子をかぶっているのでわかりづらいのですけれども、散切り頭なのです。帽子をかぶって履きなれないような大きな靴を履いて、洋傘をもって、わけわからないのですけれども、こんな形の洋服を着ているわけです。このような形で当時の日本人の格好なり、スタイルなり、あるいは無理に欧米化しようとする姿をとらえたりとかしているのです。

ところが、日本人というのはそのようなところをみていないというよりも、むしろ自分たちが一生懸命これからどうしようかということに汲々としていたということもあるのでしょうかけれども、例えば教育とか、学ぶということを考えても、そういうも

のに対する一生懸命学んでいこうということに汲々としているさまざまな日本人の姿が浮かび上がってくるのです。

例えば、これなどは辞典がいろいろ発行されて、いわば辞書の中に埋もれてしまっているという感じなのですけれども、このように何かあるときさまざまな形で向学心旺盛といいますか、そういうものが日本人の象徴的なものとして出てきています。

そのほかでいいますと、これは英語を学ぼうという人なのですからけれども、これもさまざまな英和辞典、「これも英和、あれも英和」とだじゃれたタイトルがつけられていますけれども、こういうのがあちこちから学ぼうとしている人のところに突きつけられて、この人が目玉だとか、口だとか、鼻とかにこのような辞典を突きつけられてひいひいしている。このような状況がかかっていたりするので。

これは憲法とのかかわりなのですからけれども、憲法ができるその前後に、やはり先ほどの辞書の話と同じで、さまざまな説明書だとか、注釈書だとかそういうものが雨後のタケノコのように出てくるのです。それをこのように漫画として描かれて、ここに憲法という殿様がかごの中にいて、その周りにその注釈書や解説書などがずらずらずらっと並んで大行列をしている。このようなことも描かれているのです。

今、例えば教育のもので本がこのような形で非常に出ていているということをご説明しましたけれども、これ一つとりましても、普通の記録、写真だとか錦絵だとか、あるいは文章などで書かれていてもなかなか理解できないと思うのです。ところが、今みてもらったように、3つばかりピックアップした中でもどれだけ日本人が新しいものを取り入れて、あるいは新しい知識を身につけようと思って、ある意味で端からみていると哀れになるぐらいな形での一生懸命さ、そういうものがこういう本の出版だとかそのようなことからみることができるとは思わないかと思うのです。

あるいは、これは記憶術というものがブームになるということ自体もある意味で知識だとかそういうものの欲求の一つの結果なのかもしれませんけれども、そういうものがブームになると、今度記憶術の本があちこちから出て、ここにてんびん棒を担いで売って歩いている人たちも記憶の本を売って歩いているということで、こんなことは当然なかったのでしょうかけれども、まさしくブーム、このようなことをこの1枚の絵で象徴することができるのではないかと思うのです。

このような中で、例えば女学生なども、もともと江戸時代に女の人たちは教育云々ということにはなかったのでしょうかけれども、明治時代になりますと、今ほどではなくてもいろいろな意味で教育を受けられる機会が多くなるということで、その中でいわゆる女子の高等教育を受けた者などが出てくるわけです。

こういう形で、えび茶式部などとよくいわれているのですけれども、卒業証書を受け取ってて天狗になっているというような女学生たちがいたりとか、もっとすごいになると、例えばそういう女学生もいろいろな意味でだんだん人数がふえてきたりすると、勉強というよりも墮落してしまうなどということを描かれたのがこれなのです。

後ろについている人と同棲か何かしていたのか知らないですけども、赤ん坊をしょって、学校を卒業して田舎へでも帰るような姿をこのような形で描いたりとかしているのです。

あるいは、これなどは当時の女学生がたばこを吸って、今では女の人が吸っても別に違和感なくなってきたけれども、逆に健康のために吸うということ自体が余りいいことではないというのが男女関係なくいわれています。当時としてはこんな感じで、例えば女学生がたばこを吸って、新聞をみながら議論をしている、談義をしている、こんな漫画なども描かれているのです。

最後に、そういう人たちがいてどうなるかという、女学生が大仏に擬せられているのですけれども、最後はこのような形で女学生が世の中を席卷しているような状況で、それを記念した形の女学生の格好をした大仏様みたいなものがつくられるのではないかという風刺画なわけです。

こういうのをみても、女学生が教育の開放の中でさまざまに進出して能力を発揮してきたけれども、漫画的にいうと、今幾つかみてもらったように、すごく自由で本当に今までにはない、いいも悪いも含めまして新しい女性像、そんなものが1枚の絵の中にさまざまに展開されていることがわかるのではないかと思うのです。

あと、風俗としまして、例えばひげというのが男の人の象徴的なものとして用いられたりしていたわけです。これは、さまざまなひげの形で、地位をあらわすということでこんなものが象徴的に書かれていたりするのです。下の方になりますと、ひげの世界でさまざまな、例えばこれは人力車夫、今でいうと職業差別みたくなくなってしまうのでしょうかけれども、ここでいうとそういう人さえもひげを生やす、そんな世の中になってしまうのではないかということひげの流行という形でかかれています。

あるいは、女性の髪型もひさし髪という、前の方にひさしのように出した髪が流行したりとか、日露戦争のときの二百三高地との絡みで二百三高地というまげの種類で高くなったものなのですけれども、こんなものがかかれたりとかして、さまざまな流行などを漫画として記録しています。

そういう中で、例えば今でもそうでしょうけれども、これは野球のブームなのです。学生が野球ばかりに夢中になってしまって、本はクモの巣が生えてしまった。このようなものも描かれているのです。

今、ずっとみていただきましておわかりいただけたと思うのですけれども、ほかにもいろいろ描かれているのですけれども、その中の幾つかを取り上げたにすぎません。ただ、それらをずっとみていただく中で、やはり普通の写真だとか、錦絵だとか、そういうものとは違った、漫画ならではの記録性、そこら辺のものがほんの数例の紹介ではありますけれども、ご理解いただけるのではないかと思うのです。こういうものの中から時代だとか事象の本質がぱっと浮かび上がってくる。そのようなところに漫画の意義があり、あるいはそこから時代を読み取る、そのようなことが可能であって、

今まで漫画というものを記録としての資料としてという使われ方が少なかったのです。

ところが、実際にはこのような形で「团团珍聞」もそうですし、「ジャパン・パンチ」もそうですし、「東京パック」もそうでしょうけれども、非常に大きな影響力をもっていた、今の時代のイメージとちょっと違うのです。そういう背景の中でこういうものがさまざまに記録されていたということを考えますと、ここで改めて漫画というものの記録としての資料性、そこら辺のことを考えてみる必要があるのではないかと。そこからほかではみえてこないもの、あるいは何か新しいことが発見できるのではないかと。そのようなことを幾つかの中から紹介させていただきました。

私はこういうものに興味をもってやってきたわけですが、実は時間がない関係で出さなかったのですけれども、これを錦絵だとか、写真や何かと比較してみると、逆に非常におもしろいことがわかるのです。写真としてどのようにとらえられてきたか、錦絵としてどのようにとらえられてきたか、それが漫画としてどのようにとらえられてきたか、そのようなことをみることができると思うのです。

最後に、象徴的なものを紹介させていただきたいと思うのです。これは皆さんのレジュメのところにあると思うのです。最初にも申しあげましたけれども、電気だとかガス灯などが出てきますと、そのすばらしさでみんなが見上げて驚いている錦絵などというのはよく出ているので、皆さんもご記憶にあると思うのです。それが漫画になりますと、ここに行灯があって、行灯はランプというものが出てきたことによって足をすくわれてだめになってしまっているのです。そのランプはどうなのかというと、今度はガス灯に後ろから刀で切りつけられてのびてしまっているような状況なのです。その刀で切りつけたガス灯はどうかというと、電気が出てきたことによって足を引っぱられて、人のことを切りつけているところではないというような状況なのです(6)。

このようなことで、新しいものがどんどん出てきて、それによって古いものが捨てられていって、日々時代が変わって行って、その中で、きのうは新しいと思っていたものが次のときには古くなって無用のものになってしまう。錦絵などで象徴的に描かれているものからすると、このようなイメージといいますか、こういうのは出てこないと思うのですけれども、例えば照明ということを考えましてもこの漫画一つでそのあたりのことがみてとれるのではないかとと思うのです。

そのようなことから、ぜひ皆さんにも何か機会がありましたら、漫画の資料、記録としての漫画、そういうものを改めて考えていただきながら、当時の漫画をみていただくと、今まで考えていなかったこととか、ちょっと別な視点からものがみえてきたりするのではないかとと思うのです。そういう面で漫画というものを改めて位置づけていただければと思っています。

余りにも資料が多過ぎて、この時間の中で細かいことが紹介できなくて、それだけにあちこち飛んでしまった形の紹介になってしまったかもしれませんが、いずれにしてもそういう中で何となく漫画というものについてご理解いただけたのではな

いかと思っています。

一応1時間ということで、もうそろそろ時間になりますので、終わらせていただきたいと思うのですが、この後、皆さんと質疑応答の中で細かいことについてお答えできるものについてはお答えしていくという形をお願いしたいと思います。

簡単に申しわけありませんが、いろいろありがとうございました（拍手）。

質疑応答

○司会者 湯本先生、ありがとうございました。

それでは、お待たせいたしました。会場の皆さんのご質問がございましたらお受けいたしたいと思いますので、ご所属とお名前の後にご質問をいただければと思います。

先生、これどうもありがとうございました。お返ししておきます。これは原本といえますか、その当時のものなのでしょうか。

○湯本 原本です。例えば、先ほどいいましたように、『ジャパン・パンチ』などというのは、日本人に原稿を彫らせていたので、日本人はスペルがわからないので間違ったスペルを書いたりしているとそのまま彫ってしまうのです。ですから、結構わけのわからない文字が出てきたりということがあったりします。そのようなことから、日本の漫画雑誌がスタートしたということでも、これは記念碑的なものだと思います。

○司会者 それをお回しいただいて本当にありがとうございます。その手に入れ方をちょっと伺いたいのですけれども、先生はどのようにしてそれを手に入れられたのですか。

○湯本 神田の古書店などで江戸や明治の古書を扱っているところ、ああいうところなどに行けば、頼んでおけば入るのではないかと思います。いわゆる古い古書をやっているところが一番入手しやすいのではないかと思います。

○司会者 どのぐらいするものなのですか。値段というのはどのようにつくのかあれなのですが。

○湯本 これは号数だとか、あとは私もいろいろ調べているのですけれども、『ジャパン・パンチ』で新しく発見された号とかあるのです。そのようなことによって大分違ったりするのでしょうかけれども、大ざっぱに言って1冊、例えばこういうものが出てきて、創刊号などではなく一般的なものだったら十数万円とか20万円ぐらいとか。

○司会者 1冊だけで。

○湯本 1冊で。そういうものではないかと思うのですけれども。

○司会者 オウムがビールを飲んでいる漫画があって、よくみると「バスペールエール」と書いてあって、三角のマークがあって、イギリスのパブでブリティッシュパブに行くと今でも飲めると思うのですけれども、普通のデパートなどに行くと洋酒売り場には洋もののビールがありますけれども、三角形のマークの入った瓶入りのビールですよね。これが明治5年ですから1872年ぐらいからもう飲んでいるという状態で

すよね。だから、120年以上にわたって日本に入り続けているということだと思うのですが、ほかに漫画からわかる、現代に続いている風俗のようなものはどういうものがあるのでしょうか。

○湯本　さまざまなのですけれども、例えば、『ジャパン・パンチ』などだとボウリングなどというものも出ているのです。ボウリング誌などでいうと、日本の近代的ボウリングの始まりというのは新しく、たしか戦後ぐらいですか。そこら辺から青山かどこかにできたボウリング場というのが最初だということなのですからけれども、実際に居留地や何かでそのような形でボウリングをやっていたりとか、よくみますと、後ろのところに日本人がピンを立てたりしている図などがあるのです。それはそういうものに雇われていたということで、当時の日本人なども一部かもしれませんが、ボウリングということも認識していたと思います。あるいは、さまざまなスポーツなどもほとんど今と同じような形で居留地でやられて、それが広がっていくという状況がありますので、そういう面では意外に早くから向こうのものが日本に入ってきたということが、漫画でも描かれているということで、ボウリングなども『ジャパン・パンチ』以外だとその時代にかかれたものは余りないような気がするのです。ほかにもいろいろありますけれども、記録としての漫画といえますか、そこら辺のものは重要視されるべきではないかと思っていたりするのです。

○A　大学の者で Aと申します。きょうは最後しか聞けなくて悔しくて、でも実物を実際に手にとらせていただいてうれしくて、うれしくて、相当勇気が必要だったと思いますけれども、ありがとうございました。

雑誌の入手の仕方気づいたことですが、今度、神保町の和洋会でそういう目録に『团团珍聞』の実物が数冊、三、四巻からだと思えますけれども、七、八千円で載っています。私が申し込みたくてもお金がないから、皆さん、もし和洋会の目録が来ているならばぜひみてください。来週の金曜日、土曜日です。

思いがけないところで破損の恐れなく、創刊号とか非常に少ない雑誌はともかくとして、復刻に走らないまでも実物は入手できることも運がよければあると思います。目録をもらっていない方なら神保町の古書会館にでも電話してみて至急送ってもらってください。

○湯本　今のお話とのかかわりですが、実は『团团珍聞』も、あるいは『東京パック』も非常に高い本なのですが、復刻がされております。一般の人には手が出ない金額なのですが、大きな図書館などには、恐らく法政も含めてあるのではないかと思いますので、現物ではないにしても、こんなものがかかっている、あるいは全体の流れとしてこのようなことなのだとすることをみることは可能だと思いますので、もし興味がありましたらぜひごらんいただいて、当時の息吹を感じただけであればありがたいなと思います。

○B　Bと申します。きょうはありがとうございました。

漫画の重要性というか、学問としてさらに追求して調べたいという場合に、日本の大学の中でこういった分野を専門としているというか、取り扱っているような大学があるのかどうかわからないのですけれども、先日、京都精華大学に漫画学部というのができたというのは聞いたことがあるのです。もし学びたい場合、そういった歴史を探るといって研究をしているような大学をご存じでしたら教えていただければと思います。

○湯本　今ご指摘いただきました京都精華大学とか、一部漫画というものに興味をもってそういう形で教えているところがありますけれども、ほとんどが現代の漫画とか、実技だとか、そういうものが主なのです。

漫画史とか漫画で歴史を探るといって本格的に取り組んでいるところが残念ながらないのです。個々の研究者なりがぼつぼつ取り組んだり、あるいはあるテーマをもってそれを調べるために漫画の資料や何かもそこら辺の分野のことをピックアップしているというような状況で、今ご質問いただきましたような形で本格的な形で漫画史、あるいは漫画資料についてちゃんとした形でやっているという大学というのは残念ながらないのではないかと思います。

○司会者　似たような質問を私も伺いたいと思ったのです。現在、先生が法政大学の文学部日本文学科で教えていらっしゃるということと漫画というものの位置づけが、何か文学部というと源氏物語を読んでいたたり、夏目漱石を読んでいたたり、そういうイメージがあるのですが、どういう文脈でつながっていくのかというお話をちょっと伺いたいと思ったのですが。

○湯本　私が授業で伝えたいと思っているのは、文学をやっている、あるいはほかの専門科目でもそうでしょうけれども、やはりその背景として社会のことだとか、いろいろな制度のことだとか、風俗のことだとか、そういうものを知らない、専門科目をやるにしても浅いものになってしまうのではないかと思います。

学生さんたちはそのようなことでそれぞれの専門分野をやっているのでしょうけれども、それとはちょっと違うけれども、このような形でいろいろな漫画というものから広がりをもっていただいて、それがヒントとなって、もしかしたら自分が気がつかないあたりから専門分野についてのアプローチができたりとか、そのような可能性もあるのではないかと思います。

例えば文学でいいますと、さまざまな文学者とか、明治の後期になると自然主義のあたりのことが非常に漫画として描かれたりしているのです。そうしますと、恐らくそこら辺のところは、漫画資料ということにかかわらないでやっていた場合にすっぱり抜けてしまうと思うのです。それをみることによって、それがお役に立つかわからないのですけれども、少なくともこういうものもありますよ、このようなものも資料としてちょっとみてください、そういう提案みたいのができればという形で授業をしています。

○司会者　　実は、この連続記念講演会の第9回、6月30日ですが、東洋大学文学部フランス文学科の先生なのですけれども、朝比奈美知子先生にお越しいただいて、「フランスの挿絵入り新聞『イリュストラシオン』からみた日仏近代」ということでお話を伺っています。そのときはフランス人から日本をみますと、1860年代から70年代、江戸の末期から開国にかけてジャポニズムの非常なブームがあって、日本という外国に対する興味や浮世絵に対する関心などが非常に高まって、だれもが一度行ってみたい国と夢みる場所としての日本があった。その後、80年代から90年代ぐらいが物まねをする国日本ということで、きょう先生からお話があったような鹿鳴館時代を背景としたような西欧の物まねをしている東洋人というのがあった。90年代から後、日清戦争からは対外侵略に出かけていく日本、非常に扱いづらい凶暴な猛獣のような、物まねをする猿から猛獣としての猿に変わるようなイメージの変遷があるという話を伺ったのですけれども、日本の漫画、あるいは漫画新聞をみたときの明治という時代の中の流れというのはどのように考えればよろしいのでしょうか。

○湯本　　例えば、一番長いものとして『团团珍聞』というのが明治10年から40年までずっと続いているわけです。実は、『团团珍聞』というのが生まれた背景は自由民権運動の中で野村文夫という人が、幕末にヨーロッパへ密航留学をして、その後こちらに帰ってきて官途に着くのですけれども、いわゆる薩長以外の広島出身ということで、いろいろな意味で虐げられて、それが自由民権運動のときに向こうでみてきた『パンチ』というものを参考に、野に下って為政者だとか、政治、風俗、そのほか社会の矛盾や何かをちゃんとした形で漫画というもので風刺してアピールしていこうという形でつくったものなのです。

　　実は、そういう形で自由民権運動の時代には非常に有名な作品などが幾つも出てきて、小林清親だとか、本多錦吉郎だとか、田口米作だとか、さまざまな画家や浮世絵師がそういう形で描いていくのです。実は、『团团珍聞』が後半になりますと自由民権運動が衰えたりとか、日清戦争、あるいは日露戦争ぐらいになりますと、風刺の力が衰えてくるのです。それはなぜかといいますと、例えば『团团珍聞』に日露戦争の漫画などをみると、ほとんど日本がすばらしくて、ロシアはだめだという、いわゆる当時の国論がそのまま反映された形で、そういうものに対する風刺というのがほとんどなくなってきているという状況があると思うのです。

　　そういう面では、自由民権時代のエネルギーといいますか、為政者を風刺するようなものがちょっとなくなってきてしまっているのではないかと思います。

　　実は、そのような流れが最終的に漫画が明治時代の末に衰えていく一つの原因なのですけれども、その決定的なものとして大逆事件があるのです。それによって言論が統制される中で、漫画も風刺力が衰えてきてしまうわけです。明治時代の最後の方というのは、衰えた漫画の時代ということができると思うのです。

　　それが逆に、今度大正時代になりますと、全く別な形で漫画が再生してくるのです。

その再生というのは何かというと、新しい人たちによつての新聞漫画です。当時の新聞というのはどちらかというと漫画よりも挿絵だったりという形で、漫画としては雑誌メディアが主流だったわけです。

ところが、今いましたように、小林清親にしろ、本多錦吉郎にしろ、一人は浮世絵師であつて、一人は画家なわけです。実は、明治時代の漫画を描いていた人というのは主にそういう別に本画があつて、それと一緒に漫画をかいていたという人たちなのですけれども、言論統制の中でそういう人たちがだんだん漫画というものから去っていつてしまうわけです。そうすると、その空白のところに新しい人たちが出てきて、新しい時代をつくっていく。それがいわば大正時代ということで、その新しい人たちというのはだれかかというと、例えば岡本一平だとかそういう人たちに象徴される若い人たちなのです。その人たちは明治時代とはまた別な形のさまざまな漫画をつくり出すことによつてもう一度漫画界が活性化してくるわけです。それはなぜかということ、風俗というものをより見詰めてかいたりとか、今のコミックだとかストーリー漫画に通じる漫画漫文という新しいスタイルですね。ストーリーが展開される漫画をかいたりとか。

漫画家というのは今、我々は当たり前のようにいっていますけれども、漫画家という職業が確立したのが実は大正期なのです。そういうのを確立するために漫画家というもの、あるいは漫画というものをアピールするというような運動を展開するのです。そういう中で明治とは違った新しい大正期の漫画というものが確立していくということです。明治でいいますと、最初のエネルギーというのがだんだんしぼんでいった中で大逆事件によつてはっきり大きな転換が来る。そのような考え方で流れはとらえられるのではないかと思います。

○司会者 風刺から風俗に移つて、ストーリー漫画に来てという大きな流れがあつて、恐らくストーリー漫画の中には文学性も含まれるでしょうし、その次にはインタラクティブな漫画としてのゲームというのが控えていて、今21世紀のそこまでつながってくるのだらうという気がいたしました。

○A ばかばかしい質問かもしれませんが、『团团珍聞』と『驥尾団子』の関係は何なのですか。どういう違いがあるのでしょうか。

○湯本 『团团珍聞』の兄弟誌という形で『驥尾団子』というものがあるわけです。同じ团团社という会社から発行されているわけです。このところをみておわかりいただけたと思うのですが、狂句だとか狂歌というものも掲載しているのです。『团团珍聞』が非常に人気を得ていたので、そういうものを全部載せるスペースがなくなったので『驥尾団子』という雑誌を発行しましたよというのが実は表向きの理由で、発行のときにそのような理由を書いているのです。

ところが、裏の理由としましては、実は片方が何らかの形で発刊停止になった場合、片方を助けるという形で、マルチンにも言論統制の中で発刊停止ということがありま

すので、それを助けるための安全弁として同じようなスタイルだけれども、2誌つくった。それが真相だと思うのです。

○司会者 先生、漫画などを含めて明治の人物事典などもつくられていますけれども、明治時代の魅力的な人物でお好きな方がいらっしゃれば何人か、後学のためにも伺いたいのですが。

○湯本 好きな人物は特別ないですけども、実は私、今大学院の方で漫画の授業をやっているのです。その中で講義しているのが、『团团珍聞』などである人物を特定の動物などになぞらえて表現するという方法があるということです。一番単純な例でいうと、熊は大隈重信なわけです。例えば、ムツという魚は陸奥宗光なのです。そのようなことでやっていくと、例えば象がかかれていた場合、これは2つの人物が考えられるのです。1つは、大久保一蔵、要するに大久保利通なのです。もう一つは、後藤象二郎、あれも「しょう」という字が「象」と書きますので。例えば、象というものが出てきた場合に、これは大久保利通をあらわしている場合もあるし、後藤象二郎をあらわしている場合もあるわけです。

そのような形で読み解くことによって何をいっているのか、そこら辺のことは非常におもしろくて、例えば鯛というものがかかれていても、鯛というのも2人の人物をあらわしているのです。1人は鯛でおわかりだと思えるのですけれども、板垣退助というのは結構鯛でかかれるのです。ところがもう一人の人物で五代友厚。これも鯛なのです。鯛として描かれた場合、五代友厚であったり、板垣退助だったりするのです。

例えば、鯛の横にタコがいた場合、これは五代友厚の鯛なのです。なぜかというところ、こちらにいるタコというのは黒田清隆、黒タコなのです。黒田はタコとして描かれたりするので、北海道の官物の払い下げ事件や何かとの絡みで鯛とタコが出てきたら、こっちは五代友厚の鯛なのです。

逆に、鯛の横にカメがいた場合は、恐らくこちらの鯛というのは板垣退助だと思えるのです。こちらのカメは何だといったら、板垣退助が内務大臣のころ、その腰巾着みたいにしていた官僚の三崎亀之助なのです。そこからカメと鯛が描かれていた場合には、こちらの鯛は板垣退助をあらわす。板垣というのは、当たり前ですけども、垣だから柿の木であらわされたりもするのです。もう一つ、垣根として表現されたりすることがあるのです。逆に、垣根として表現されると、木戸孝允は木戸なので木戸で表現されたりするのです。そうすると、微妙に垣根なのか木戸なのかという話があるのです。

要するに、そういう形で明治のさまざまなものをやっていくと、あるいは人ではなくて、例えばナマズというのは官僚をあらわします。ナマズのように立派なひげを生やしているところからきています。それとの関係で、ドジョウといったら下級官吏をあらわすわけです。ナマズより小さくて、ちょぼちょぼとさえないひげが生えているといえますか、そのような形で幾つかキーワードみたいな形で読みとっていくと、お

もしろい絵解きみたいなものができるのではないかと思ったりしています。

○C きょうは楽しい話をどうもありがとうございます。Cと申します。ターゲットというか読者というのは、みますと、多少英会話の練習とか、英語の解説とか入っていますよね。そういうのは外国人も意識しているのか、あるいはそのような学生とか、新しい知識人とか、そういう人を対象にしているのか。どの辺の読者を考えて、先ほどおっしゃったように自由民権運動とかその辺で今までの体制と違う体制の人なのか。みんな漫画誌によってセクトというか、セクションに分かれていて、これは自由民権派とか、これは旧体制派とか、保守派とか、そのような形で。出ているのも週刊誌のやつと月2回とか、3回とか、頻度が5日、10日、15日とか出ているみたいですがけれども、全部が全部週刊誌みたいではないですし、『团团珍聞』は週刊みたいですがけれども、そういう頻度と読者層と、いろいろな漫画誌があるみたいですがけれども、政治色がありや否やか、その辺を教えていただけたらと思います。

○湯本 まず、『团团珍聞』とか『東京パック』などはご指摘のように英語とか、『東京パック』などは中国語などでもキャプションが書かれています。『团团珍聞』の方は、先ほどいいましたように、これを創刊しました野村文夫という者が幕末に英国に密航留学をしますので、そこで向こうの『パンチ』の影響を受けているということで、創刊号などをみますと、英文和訳とあるのですけれども、4号をみますと、『团团珍聞』というのを英語に何と訳しているかということ、マルマルパンチと訳しているのです。そのようなことで、それなりの自由民権をリードしていった知識階級というのが読者として最初のターゲットだったと思うのです。それがだんだん自由民権運動の広がりとか盛り上がりの中で、より読者が広がっていったということがあると思うのです。

これに関しては、実は『团团珍聞』の後ろに売りさばき所というのが出ているのです。これがだんだん広がっていくという傾向がみえるのです。そういうところからも、最初は知識階級だったのがだんだん広がっていったという傾向にあると思うのです。そういう面では、自由民権運動ということでご指摘のことでは、反政府という形での言論だと思うのです。

それとは別な形で、逆にどちらかということ、例えば板垣などを批判するようなものも出ていたりするのです。『絵新聞日本地』という、これもギャグみたいなものなのですけれども、『ジャパン・パンチ』からこのタイトルをつけたらしいのですけれども、『ジャパン・パンチ』から『絵新聞日本地』とって日本のパンチだという形だと思うのです。これが創刊されたのが明治7年なのです。実は、ここの中で今いったように板垣だとか自由民権というものについて批判的な漫画を載せているのです。明治7年というにご存じのように、板垣とかそのほか西郷もそうでしょうし、副島種臣だとか、そういう人たちが征韓論との絡みで参議が下野するという前後の時期に当たるわけです。そこからある意味で、下野した人たちによって自由民権運動が活発化すると

いう経緯があると思うのです。そんななかで、これは政府寄りの漫画をかいているのです。

ところが、確認されているところによると、3号で終わってしまっているのです。ですから、基本的には当時の一般の人たちにとってはそういうことが支持されなかったということではないかと思うのです。なおかつ自由民権のこういうものは、『团团珍聞』のさまざまな類似誌などもどんどん出ていたということからすると、大きな流れとして政府を批判したり、自由民権というものをバックアップするような風刺漫画雑誌の方が主流だった、そのように考えられると思うのです。

あと、『東京パック』につきましては、このような形で見開きで非常に大きな絵などで、これはカラーで、これが非常にインパクトを呼んで評判を呼ぶのです。実は、『東京パック』のもう一つの大きなねらいというのは、先ほどご指摘ありましたように、実はこここのところに英語だとか中国語のキャプションがあつたりするのです。これは、日本だけではなくて、例えば上海だとか、英語だとか中国語圏の方にまで販路を広げようという意図が最初からあつたとみてとれるのです。実際にそのような形でやっていますし、そのようなことから明治の時代、創刊が明治38年ですけれども、そのころになって新しい雑誌を出したという中では、もう少し日本国内というよりも広がった形での市場みたいなのが想定されていた。そんなことがいえるのではないかと思います。

○D Dと申します。旧社名をQ帽子といいまして、渋沢栄一がつくった会社の一つなのですけれども、その関係でマニアックなお話をお伺いしたいのです。

明治時代に帽子がかなり広まったと思いますけれども、漫画でどのように紹介されているかお教え願いたいと思います。

○湯本 帽子とか、実はファッションというものは、結構非常に多く関心をもたれているのです。これは漫画だけではなくて、ファッションですから、例えばいわゆるファッション雑誌的なものだとか、『風俗画報』だとかといった、その図をそのままかいたりとか、そうしたものなどにも描かれているのです。これは漫画ではないのですけれども、『東京風俗誌』という中にかかれていた当時のさまざまな帽子をこのような形で紹介しているわけです。

あるいは、もっと遡りますと、明治14年ですけれども、帽子の洗濯所というような図もあって、帽子を洗濯するような商売もあつたということなのです。

これはイラストレイテッドロンドンニュースなのですが、当時の日本人の子供にも正装して帽子をかぶらせて、一人前の大人みたいな服装をさせていたりとかというひとつのはやりであつたりするのです。このような形で、先ほど象徴的なもので散切り頭で帽子をかぶっていたというのがありますけれども、いろいろな形でイラストや何かにも出てきたりとかしています。先ほどのように帽子洗濯所があつたなどということからすると、相当な需要があつたのではないかと思います。

これに限らずファッションというのは昔でも今でも興味をもたれていたのでしょうけれども、女性のひさし髪の話在先ほどしましたけれども、実は、リボンがはやるのです。例えば、リボンなどはだんだんはやっていって、最後にこんな大きなリボンになってしまって、リボンで飛ぶことができるのではないかとか、そのような漫画なのですけれども、これぐらいリボンがはやっているということなのです。

そのような形で、リボンとか帽子とかを紹介しましたけれども、まさしくファッションなどは風俗として漫画に非常に取り上げられているということがありますので、細かくみていくとまだまだ見落とししたけれども、非常におもしろい当時の時代を切り取るような漫画が出てくるのではないかと思います。

○司会者　　どうもありがとうございました。時間を超過してお答えいただきました。湯本先生にここで改めて拍手をお願いいたします。

(満場拍手)

日 時：2006年9月30日(土) 15:00～16:30

会 場：法政大学市ヶ谷キャンパス ボアソナード・タワー25F
イノベーション・マネジメント研究センターセミナー室

司 会：洞口治夫(法政大学大学院
イノベーション・マネジメント研究科教授)

(1)

漫画にみる明治の新風俗—近代化社会と「進取の気象」—

2006. 9. 30

記録としての漫画資料

- ・表現手段としての漫画の特徴
写真、イラスト、錦絵などとの相違

明治を記録した主な漫画誌

- ・『ジャパン・パンチ』1862年（文久2）～1887年（明治20）
イギリス人C・ワーグマンが創刊
- ・『トバエ』1887年（明治20）～1990年（明治23）
フランス人G・ビゴーが創刊
- ・『团团珍聞』1877年（明治10）～1907年（明治40）
野村文夫が創刊
- ・『滑稽新聞』1901年（明治34）～1908年（明治41）
宮武外骨が創刊
- ・『東京パック』第一次 1905年（明治38）～1912年（明治45）
北沢楽天が創刊

(2)



『トバエ』明治20年

(3)



『ジャパン・パンチ』明治5年

(4)



『团团珍聞』明治20年

(5)



『滑稽新聞』明治39年

(6)



『团团珍聞』明治15年



法政大学イノベーション・マネジメント研究センター
The Research Institute for Innovation Management, HOSEI UNIVERSITY

〒102-8160 東京都千代田区富士見 2-17-1
TEL: 03(3264)9420 FAX: 03(3264)4690
URL: <http://www.hosei.ac.jp/fujimi/riim/>
E-mail: cbir@adm.hosei.ac.jp

著作権無断転載